

教員名	神田 由築 (KANDA Yutsuki)
所 属	文教育学部人文科学科比較歴史学講座
学 位	博士 (文学) (1998、東京大学大学院人文社会系研究科)
職 名	助教授
URL/E-mail	

## ◆研究キーワード

芸能 / 興行 / 文化 / 近世 / 都市

## ◆主要業績

総数 (3) 件

- ・「文化の大衆化」『日本史講座7』東京大学出版会
- ・「中山歌舞伎」国立歴史民俗博物館
- ・「中山歌舞伎の歴史」国立歴史民俗博物館

## ◆研究内容

2005年度は、大きく二つの研究を行った。まず一つは、遊芸文化の展開について考察し、その成果を「文化の大衆化」(『日本史講座7』)にまとめた。まず巨大都市における遊芸の拠点であった寄席の役割を問い直した。また、阿波・淡路(徳島・兵庫県)における浄瑠璃文化を素材に、遊芸文化の地方への浸透の様相を検討した。これらの分析を通じて、寛政・享和期(1789-1804)に文化史上の様々な転機があったことが確認された。二つめは、国立歴史民俗博物館の常設展示リニューアルにともなう、調査および展示・研究用のビデオ制作にたずさわった。香川県小豆島中山歌舞伎の調査の結果、小豆島での歌舞伎の存続には「振付師」と呼ばれる、演技指導や本番の差配などさまざまな働きを行う人々が大きな影響を与えていたことなどがわかった。それらの成果を盛り込み、研究用ビデオ「中山歌舞伎」、展示用ビデオ「中山歌舞伎の歴史」のシナリオを作成した。

## ◆教育内容

学部では以下の6つの授業を担当した。「基礎ゼミⅠ」では、「歌舞伎と民衆世界」をテーマに、歌舞伎に描かれた民衆世界を探るために、受講者全員に発表をもらった。「日本近世史料演習」では、『静岡県史』をテキストに受講者全員の発表を通じて、日本近世史の研究に必要な史料読解力等を身に付けてもらった。「日本文化史概論」では、源義経をめぐる芸能・文学などを横軸にしなが、日本文化史の縦の流れを概観した。「日本近世近代文化史」では、近世の浄瑠璃太夫が残した日記をもとに、江戸や大坂の都市社会と文化について紹介した。また他教員と分担して、史跡・遺物見学のフィールドワークを行う「比較家族史(日本)」、古今東西の踊りの文化を紹介する「比較社会史」を担当した。大学院では、院生が研究成果を発表する「日本政治経済史演習」「日本政治経済史特論」と、歌舞伎・文楽などの知識を養うための演習「伝統芸能文化論演習」を担当した。

## ◆将来の研究計画・研究の展望

---

これまで近世芸能の「商品」的局面に注目してきたが、今後、非「商品」的局面にも目を向けてみたい。前者は具体的にはプロの芸能者による「興行」、後者は素人による芸能や稽古文化ということになるが、後者に属する農村歌舞伎（地芝居）や都市における遊芸文化（たとえば音曲系の芸能）に注目することで、近世芸能の享受者をより拡大してとらえることができ、近世文化の多様な側面を見ることができるであろう。

## ◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

---

- ・近世文学に社会的背景をみるなど文学との共同研究
- ・祭礼における社会のありかたなど民俗学との共同研究
- ・芸能をテーマにした音楽学・服飾史などとの共同研究

## ◆受験生等へのメッセージ

---

とにかく「実物」に接することを大切にしてください。「実物」の古文書に触れ、「実物」の文化的遺物を観て、歴史や文化について考えること。もちろん、なかには長い年月のあいだに姿を変えたものもあるでしょうから、そこから直接、歴史的事実が読みとれるとはかぎりません。けれども、「実物」は私たちに訴える何か不思議な力を秘めています。それから、古文書を読んだりモノを観たりするだけでなく、その古文書やモノが作成あるいは伝承された「現場」に行ってみること。やはり「現場」に立つことで、机の上では見えないものが見えたり、そこでしか得られない貴重な情報を入手することができます。まずは自分の目で確かめ、考える。そこから、現代社会を生き抜くに必要な批判能力が生まれると思います。